

主イエスは幼少期にヘロデ王が死んだことで、エジプトからユダヤに帰国しましたが、暴君アルケラオの迫害を恐れて、ガリラヤ地方に逃れ、ナザレと言う町で異邦人たちにまぎれて暮らしました。このナザレで少年時代を過ごし、やがて青年期に差し掛かった頃、洗礼者ヨハネから洗礼を受けました。福音書では少年時代のイエスのことはほとんど言及されていません。洗礼者ヨハネは『らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた』人物で、差し迫った終末の中で、悔い改めの洗礼を受けて、神の怒りから逃れることを解いていました。ファリサイ派やサドカイ派、律法学者たちが律法を守って生きていけば、神の救いにあずかることができると主張して、エルサレム神殿での犠牲祭儀によって救いが保証されると主張して、一般民衆を精神的に支配していました。

洗礼者ヨハネはエルサレム郊外の山里で父ザカリアと母エリザベトの間に生まれたのは、紀元の変わり目当たりの頃です。彼の父ザカリアは二四組の中で祭司の中のアビヤ組に属する下級祭司で、彼が30歳から35歳くらいの時に荒れ野で預言者としてデビューしたのです。彼が『らくだの毛衣を着、いなごと野蜜を食べていた』ということから、市中ではなく、荒れ野を生活拠点としていたことが推測されます。洗礼者ヨハネはパレスチナ地方を南北に走り、ガリラヤ湖と死海を結ぶヨルダン川のほとりで預言者としての活動を行っていました。彼のもとに集まる民衆を川の水に頭まで浸す洗礼と言う清めの儀式を行っていたのです。

マタイ福音書3章7節以下をみると、終末の到来に備えるために、罪の赦しにつながる悔い改めを象徴する洗礼を受けることを促す宗教刷新運動を展開したのです。何故ヨハネがそのような運動を展開することになったのか。それは父ザカリアが下級祭司であったために、神殿の大祭司たちと比べて経済的に極めて貧困であったからであろう。ユダヤ人歴史家のヨセフスは、祭司長が貧困祭司に分配されるべき税を横領したために、貧困祭司の間で餓死者が起こるほどだったと報告している。ですから、ヨハネは旧約聖書のエゼキエルが「わたしが清い水をお前たちの上に降りかけるとき、お前たちは清められる」（エゼキエル書36章25節）という、終末の時に神の霊が民に注がれるという約束を信じて刷新運動を展開することになったのです。この旧約の預言者エゼキエルの預言を、洗礼というわかりやすいキャンペーンによって表現したのです。

洗礼者ヨハネの洗礼運動は、律法を守る生活とエルサレム神殿での犠牲祭儀によって救われると主張してきた当時のユダヤ教社会の常識を覆すものだったことは確かです。この洗礼者ヨハネからイエスが洗礼を受けたということは、イエスが一時期ヨハネの弟子のような立場にあったことを示しているのです。イエスが、神に対する信仰を祭司集団による独占的な状態から解放して、社会的に下層の困窮者たちを神の支配のもとに招き入れる活動をしたのは洗礼者ヨハネの活動があったからこそ、始める

ことが出たことなのです。洗礼者ヨハネの洗礼運動は、エルサレム神殿を介さないで罪の赦しを教えたという意味で、エルサレム神殿を相対化する働きであったのです。ヨハネの洗礼運動はエルサレム神殿を介さないで罪の赦しを教えていた点において、「あなたの罪は赦された」と宣言された活動をしていたイエスと共通しているのです。

本当に律法を守ってエルサレム神殿で犠牲祭儀を行っていたら、自動的に救われるのか。そのような形式的な行為で、心底悔い改めることがなくても救われるのか、という疑問は、先ほども述べたように、大祭司たちが本来下級祭司たちに分配しなければならなかった税を不正に横取りしていたことが発覚したことで、疑念が持ち上がったのです。こういう疑念は、すぐに広まったことでしょう。

イエスは、「神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」という言葉に端的に示されているように、この地上において神の支配が実現することへの強い確信に基づいています。イエスが弟子たちに教えた「主の祈り」には「御国が来ますように。御心が行われますように。天に置けるように地上にも」（マタイ6章10節）とあり、その強い期待がうかがい知れる。御心と言う神の意志が地上において成就する音が期待されているのです。これは、死んだら天国で楽に暮らすというような類の思想ではなく、天地創造において神が確立させた創造秩序が再び、地上で機能するという期待なのです。

この創造秩序とは、神がこの地上を創造したときの本来の意図を指している者です。例えば、使徒パウロが、「もはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません」（ガラテヤ3章28節）と言って、平等宣言をしたことに端的に現わされています。すなわち、イエスの神の国運動は、人種、社会階層、性差を含む不平等や不条理に対して、新たな価値観を持って果敢に挑戦する運動だったのです。そして、それは、何らかの助けが天から来ることを待つといった消極的な姿勢ではなく、最終的な正義の完成を見据えて、イエスと弟子たちが今の社会に対して積極的に働きかける姿勢であったのです。

この意味で、イエスは洗礼者ヨハネの思想を受け継ぎつつ、神の国の価値観を現実社会において実現させようとしたのです。その出発点にイエスの洗礼があるのです。

私たちも洗礼によって、イエスの神の国運動へと招かれているのです。この意味でイエスの活動は社会変革であり、社会に神の創造秩序をもたらすものだったのです。その意味において、洗礼は洗礼者ヨハネの悔い改めと言う個人の救因と言う枠組みを超えて、罪赦された者が神の創造の秩序を回復させていく働きに召されているのです。確かに、個人の信仰心を大切にすることは重要です。けれども、イエスは、現実の社会に対して神の創造の秩序の回復を対峙させたのです。私たちも、自分個人の信仰における悔い改めを大切にしつつも、イエスが提唱した神の国の建設という大きな目標のために、自分の日常生活の一つ一つを吟味しながら、イエスと共に、神の創造の秩序をこの世に回復させていく務めを負っていることを覚えていきたいのです。